

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷10

タンゴ喫茶で歌う
筆者

タンゴの本場、アルゼンチンでも名をはせていたランコ・フジサワ（藤沢風子）さんは、日本でも「紅白歌合戦」にも選ばれるタンゴ歌手のトップスターだった。

そのランコ・フジサワのご主人であり、タンゴバンドのオルケスタ・ティピカ東京のバンドマスターでもある早川真平さんが、突然私が歌っていた東京新橋のタンゴ喫茶「コロムビア」を訪ねてきたのだ。ビッグバンドのリーダーが、無名の「タンゴ好き」な青年に向かってこう言ったのだ。「一緒にアルゼンチンに行ってみたいと思わないか」

つまり私は超一流のタンゴバンドにスカウトされたということだ。むろん断る理由などないから、私は「夢じゃありませんよ」ように「心で祈りながら」「よろしく願います」と頭を下

◆ プロになる！

げた。1958（昭和33）年4月、私はオルケスタ・ティピカ東京専属のプロ歌手としてスタートを切ることになったのである。

この昭和33年という年は日劇で「ウエスタン・カーニバル」

が開始され、平尾昌章（のち昌晃）、ミッキー・カーチス、山下敬二郎の「ロカビリー三人男」に若者、特に若い女性たちは熱狂した。一方で大人のムードを

かもし出すタンゴ音楽ブームも最高潮を迎え、ほかにシャンソン喫茶やラテン喫茶などが花盛りだった。人気の店に出演して歌うことは歌手のステータスでもあった。

戦争が終わって13年。この2



年前の経済白書には「もはや戦後ではない」というフレーズがおどりを、それはそのまま流行語になっていた。

時代の訪れだった。それと同時に私の人生にとっても、新しい時代の訪れを予感する出来事が起こったのである。

「神武景気」「いざなぎ景気」などとよばれる好景気、つまり神代の時代と同じと言うほど景気は上向き、日本人は音楽を聴く、それも十数年前まで敵として戦っていた国の音楽に親しむことができるほどまで、心にゆとりが生まれた。まさに新しい

その日私は、新橋にある「ブルボン」という店で歌っていた。客席の中に目立つ女性がいた。どちらかといえば「ウエスタン・カーニバル」に行くような年齢の若い女性だった。タンゴ喫茶やシャンソン喫茶などは、もう少し落ち着いた客層だったか

ら余計にその子が目立っていたのだらう。隣には母親とおぼしき女性が座っていた。「まあ、お母さんのお供だろう」と思っていたが、やけに真剣に私の歌を聞いている。それはなほに見ていると、目鼻立ちや唇、まいが気になった。

リクエストタイムがきたので、珍しいその若い女性客に私は「聞きたい歌はありますか？」と尋ねてみた。さすがにロカビリーの「ダイアナ」や「君はわが運命」はリクエストしなかったが、彼女は、当時トリオ・ロス・パンチョスや、日本でも先日亡くなった坂本スミ子さんが得意としていたラテンナンバーの「ある恋の物語」を所望してきたのだ。

そのときこの歌を初めて歌ったが、それがまさしく私と彼女にとつての「ある恋の物語」の始まりでもあったのである。（すがわら・よういち||歌手）

超一流バンドからスカウト